KOREMITE

コ 考古学　レ 歴史学　ミ 民俗学　テ 展示

— 東北学院大学博物館 収蔵資料図録 —　VOL.3

ごあいさつ

東北学院大学博物館は平成21年（2009）秋に開館した大学博物館です。大学の研究成果を社会にお伝えするとともに、博物館学芸員資格課程の実習の場として活動を続けています。一方、大学院生には学芸研究員制度を設け、雇用された大学院生は展示作成、展示解説、資料整理などの実務にあたっています。こうした教育活動によって、学芸員としての経験と実績を積んだ学生・院生から、毎年1、2名の博物館学芸員、教育委員会の文化財担当職員を輩出しています。

本書は当館の収蔵品の解説書です。いわゆる収蔵品図録は、一般的には資料そのものの物質的な情報に加え、その資料の全体像を示す資料写真で構成される淡々としたものです。それに対し、本書の意図するところは「読んで楽しい収蔵品図録」、そして「学生の視点で作る収蔵品の解説書」です。

掲載する資料の写真は、学内実習の博物館実習生が撮影し、見どころや解説文は、学芸研究員の大学院生が執筆しています。本書は、当館の教育活動の成果をかたちにするものであり、専門的な内容をわかりやすく解説するものとなっています。

毎年1冊ずつ刊行している館蔵品図録『コレミテ』ですが、今回は昭和初期に秋田の風俗や祭りの木版画を描いた勝平得之（かつひらとくし）の版画作品を掲載いたしました。とくに勝平得之による「まゆだま」は、東北らしいくらしの風景を表現したものです。また、はがきサイズの5枚ごとのセットで販売された冬の風物詩、春の風物詩の絵はがきには、雪国の子どもたちの冬の遊びが楽しげに描き出されています。こうした版画は、仙台鉄道局やJTBなどが戦前に出版した東北の民俗や温泉、郷土玩具などの紹介冊子の表紙や挿絵、口絵などに使われ、東北の観光開発における東北イメージの形成に大きな影響を与えました。こうした資料を博物館実習の一環で学生たちが展示するなどして、文化財に親しんでいただく企画を継続していきたいと考えています。

東北学院大学博物館

※本書の監修は加藤幸治（文学部歴史学科教授）が、編集・執筆は佐藤耕太郎・佐藤匠・鈴木舞香（大学博物館学芸研究員・大学院文学研究科アジア文化史専攻博士前期課程）が担当した。資料写真は、2017年度博物館実習I（学内実習）履修の文学部3年生が撮影した。

東北学院大学博物館の紹介

東北学院大学博物館は、本学土樋キャンパスに隣接し、仙台中心部の愛宕上杉通りに面して建つ大学博物館で、平成21年（2009）秋に開館しました。大学は研究をするためにさまざまな資料を保有しております。しかし、それらが市民の方々の目に触れる機会はあまりありません。当館は、それらの知的財産を一般に公開する役割を果たしています。

大学博物館の最大の責務は、最先端の研究と市民とを橋渡しすることにあります。当館が当面対象とする分野は歴史学・考古学・民俗学で、貴重な文献や考古・民俗資料を数多く展示しています。例えば、古代の遺跡から発掘された土器、中世の人々が願いを刻んで仏に捧げた石碑、江戸時代の武家が残した文書、前近代に庶民が生活に用いた日用品、病気平療のまじないに使われた道具などです。展示は、半年から2年ごとに順次展示替えされていきます。

開館時間	午前9時30分～午後5時（入館は午後4時30分まで）
休館日	日曜日、祝日・休日、大学の定める休業日
入館料	一般200円（減免措置有り）
問合せ先	住所：〒980-8511 宮城県仙台市青葉区土樋一丁目3-1 TEL：022-264-6920　FAX：022-264-6917

勝平得之と東北の観光化

鉄道の開通と東北イメージ

明治24年（1891）に東北地方と東京を結ぶ鉄道が開通し、上野駅は東北地方への玄関口となりました。東北地方への旅が比較的簡単になったため観光客が増え、それに伴い東北地方の観光地化が進んでいきました。昭和初期、仙台鉄道局は東北の魅力をふんだんに紹介したガイドブックを出版し、多くの観光客を上野から導いていきます。都市部の人々は東北地方ならではの雪国の生活文化や風景にあこがれを抱くようになりました。

一方で当時の東北地方は、飢饉や自然災害に見舞われる東北の農山漁村における生活の困難さにあえいでいました。東北地方への疲弊とイメージのうえでの憧憬は、奇妙にも共存していたのです。その二面性を持った東北イメージは、昭和初期の国内旅行ブームと東北地方の観光化を下支えするものでした。

勝平得之が表紙・挿絵を手掛けた、
石坂洋二郎編『東北温泉風土記』仙台鉄道局（1940年刊）

仙台鉄道局編『東北の玩具』
同局（1937年刊）の
東北郷土玩具地図

蒐集趣味の時代

都市を中心に旅行や蒐集（しゅうしゅう）が流行した大正から昭和初期の時代、東北ならではの造形や風景、習俗は人々をひきつけました。また、観光地は、地域らしさや独自の魅力を伝えるためにさまざまな土産物や名物を作り出していきました。東京や名古屋、大阪では東北の魅力である土産物や名物を熱心に収集するグループができ、趣味家たちは各地でさまざまなものを収集対象とし、収集旅行を行い、その土地の歴史や文化に触れることを大事にしました。東京からの長距離旅行、東北内での小旅行が盛んになると、それぞれの観光地は魅力を知ってもらうため、さまざまな名物などを考え、商品化しました。こけしはその代表例で、木地職人達は技術を得た師匠の教えに連なる系統で独自性を主張しつつ、産地ごとの特色が生まれていきました。

西澤笛畝編『東北の玩具』
仙台鉄道局（1938年刊）

東北地方をイメージづけるメディア

当時刊行された『東北の民具』と『東北の玩具』などには素朴で温かみのある郷土玩具の画、温泉地の風景などの挿絵が豊富に掲載されています。これらを描いた勝平得之（1904～1971年）は故郷秋田県、東北の風俗や風景、民俗行事などを生涯にわたって版画で表現し続けた版画家です。勝平の版画作品は、東北の風景を紹介するものとして、日本の生活文化の研究書や、観光ガイドブックなどに掲載されました。勝平が描いた東北の風景は、人々が求めた「東北らしさ」と合致し、当時の観光ブームとも相まって、日本社会に広まっていったのです。

『みづゑ』各国農民美術特集号』（1920年7月号）で
紹介されたロシア・東欧の農民美術作品

彼は単なるノスタルジーによって東北の生活文化にこだわりを持ったのではなく、ある思想的裏づけがありました。それが農民美術運動でした。この農民美術運動とは、農閑期に木彫りや刺繍を作り販売し収入を得るとともに一人一人の芸術的感性を開花させようとした運動です。これを推し進めた山本鼎（やまもとかなえ）は、西欧留学から帰る途中でロシアの農民美術に出会いました。その影響を受け、彼は日本独自の農民美術運動を長野県から広めていきました。勝平得之は秋田県で開催された農民美術講習会に参加して木彫りを学び、秋田の風俗人形を作りながら版画制作に取り組んでいったのです。

まゆだま

作成年代　昭和16年(1941)
寸　　法　40.2×50.6cm

まゆだまとは、小正月や初午などに、繭の形の団子を作って木の枝に差したものや、これを作る行事を指します。もとは稲をはじめとする農作物の豊作を祈願するためのものでしたが、養蚕の盛んな関東地方や中部地方、東北の一部などでは、繭の豊産を前祝いするための繭玉飾りが盛んです。材料は米の粉が一般的ですが、小麦粉やトウモロコシの粉などを使う地域もあります。この作品では、東北らしい風景としてまゆだまを母娘で作る様子が描かれています。

秋田風俗 冬の版画集 其一 （2色刷り）

作成年代 昭和9年(1934)
寸　法 15.0×46.8cm

雪むろ

雪室とは、かまくらという秋田などで行われる小正月行事の際に作られるものです。一般的には、これ自体をかまくらと呼ぶことが多いですが、中で子どもが遊ぶことや、水の神を祀る行事のことも指します。この作品には、雪室の中で火鉢を囲んでいる二人の子どもが描かれています。

ほんでき棒

ほんでき棒とはこしあぶらの木を小刀で削って簡単に彩色したものです。小正月に行われる行事として、子どもたちがこの棒を持ち、前年に嫁入りした女性の尻を叩いて回るというものがあります。この作品では、ほんでき棒を持って楽しそうにはしゃぐ子どもたちが描かれています。

梵でん

大きな串状の棒の先に紙を幣（へい）のように切ってつけたものを梵天（ぼんでん）と呼びます。もとは神を宿す役割を持っていましたが、現在は主に祭りの際に行列を表すための道具などに使われます。この作品には「三吉神社」と書かれた札を持っている男性が描かれていることから、秋田県の太平山三吉神社で行われる三吉梵天祭の様子と考えられます。

踏たはら

踏俵は稲藁（いなわら）などを円筒形に編み、内底に下駄や草履を取りつけた道具です。これは新雪を踏み固め、道を作るために使われました。この雪踏みは大人の仕事であり、村の各家から人を出していました。

はこ橇

橇（そり）は雪の上を滑らせて、人や荷物を乗せて運ぶための道具です。その中でも、箱橇は中に人を乗せて運ぶために使われます。箱橇にはさまざまな大きさがあり、この作品では赤ん坊を乗せる小型の箱橇が描かれています。

秋田風俗 冬の版画集 其一 （多色刷り）

作成年代 昭和14年(1939)
寸　法 13.8×9.0cm

雪むろ

ほんでき棒

梵でん

踏たはら

このページの作品は前ページの作品を多色刷りにしたものです。画は同じものですが、こちらは独自の色摺り技法により色彩が表現されています。ぜひ前ページの作品と見比べてみてください。

はこ橇

秋田犬

作成年代　昭和9年(1934)
寸　法　13.6×9.0cm

秋田犬は、天然記念物に指定されている秋田県原産の日本犬です。大型のもので体高70cmに達し、立ち耳、巻き尾が特徴です。赤い紐を体に巻きつけて散歩をしているような場面が描かれたこの作品では、真っ白な秋田犬の毛並みがよく表されています。

雪べら

作成年代　昭和9年(1934)
寸　法　13.6×8.8cm

積雪地方で使われる鋤(すき)形の雪かき用具のことを雪鋤や雪べらと言います。粘り強くて軽く、折れにくいスギやブナ材が用いられます。この作品には、背景に顔のついた雪だるまが描かれています。雪かきで集めた雪に顔をつけて遊んでいたのでしょうか。

氷すべり

作成年代　昭和9年(1934)
寸　法　13.6×9.0cm

氷すべりとは、氷の上を滑る遊びのことです。スケートとも言います。スケートは明治時代中ごろに、仙台の五色沼で、外国人が子どもたちに教えたのが最初とされています。この作品では、氷すべりをする2人の疾走感がよく表現されています。

凧あげ

作成年代　昭和9年(1934)
寸　法　13.6×8.8cm

3月や5月の節句などに凧を揚げる行事を凧揚げと言います。凧揚げの多くは、初節句のお祝いや豊作を祈願して行われます。凧は、日本各地に広まって以降、豊かな郷土色を持ったものが数多く生まれました。

ボッチ

作成年代　昭和9年(1934)
寸　法　13.6×9.0m

ボッチは、はんてんやモンペなどと同じく、防寒具の1つです。被り物として用いられる帽子のことをボッチと言い、さまざまな種類があります。この作品については、左側の被り方をフロシキボッチ、右側をオコソズキンと言います。

勝平得之が描いた東北の人々

勝平得之は、生涯にわたって東北の人々の姿を表現し続けています。彼が描き続けた東北の人々とは、いったいどのような人々だったのでしょうか。彼の作品が掲載された柳田国男・三木茂『雪国の民俗』(養徳社、1944年刊)に書かれたある文章に、東北の人々の姿が端的に表現されています。

> 溢れる暖さを眼にたゝへ、静かな喜びを口もとに含み、そして牛のやうな粘りづよさを皺にきざみこみ、父祖から受けついだ逞しい精力を皮膚に光らせた顔。都会人がとつくに失つたものを、この人たちは根づよく持ちつゞけてゐる。これが日本人のほんたうの表情であらう。
> 農に従ふ精神は、国土と青人草とが一体となることであり、そのなかに無限の喜びを見いだすことである。(中略)
> 農に従ふ人たちの日常のくらしには、この喜びがいきいきと現れてゐるのである。(17頁)

この文章によると、東北の人々は、都会人が失った暖かさやたくましさなどを持っており、このような姿が日本人の本来の姿だと評価されています。そして、農業に従事する彼らは、国土と青人草(あおひとくさ、人民)が一体となることに喜びを見出していました。これが、勝平得之が描いていた東北の人々の姿だったと考えられます。

この図録で紹介している彼の作品の数々から、ぜひこのような姿を感じとってみてはいかがでしょうか。(文責：佐藤耕太郎)

秋田風俗 冬の版画集 其三

作成年代 昭和14年(1939)
寸　法 14.8×46.6cm

かまど

かまどは釜や鍋を置き、煮炊きを行う場所の総称です。かまどは地域や時代によってその形態もさまざまで、家の規模でかまどの数も変化しました。また、かまどは神聖なものとされ、神を祀っている場所でもありました。

ゐろり

囲炉裏(いろり)はかまどと同じく火を焚き、煮炊きをする場所です。そのほかに暖房のためにも用いられます。西日本ではかまどが普及していましたが、東北地方では囲炉裏のほうが普及していました。この作品では、囲炉裏で暖をとる子どもの姿が描かれています。

こたつ

現在も全国的に使われている炬燵(こたつ)は、室町時代に誕生し、江戸時代以降急速に普及しました。このように全国的に普及しているものも、当時の東北ブームの中で、東北らしさを表すものの一つとして描かれました。

えじめ

えじめはエジコやエゾメなどと呼ばれる赤ん坊を入れておくための道具で、さまざまな形態があります。その中でも藁を編んだものが広く普及していますが、この作品には木製の桶が描かれています。これに赤ん坊を入れておくことで、繁農期でも夫婦で仕事に専念することができました。

まゆだま

繭玉は家中のさまざまな神に供えます。歳神や蚕神など、供える神によって繭玉の数が変わる地域もあります。また、それに合わせて神棚や座敷など、供える場所が異なることもあります。4・5ページの「まゆだま」も参照してみてください。

はこそり

作成年代　昭和13年(1938)
寸　法　9.0×13.6cm

雪の多く降る秋田では、人や荷物の運搬などのために、さまざまな形の橇が作られました。この作品の箱橇は、「秋田風俗　冬の版画集　其一」(6~9ページ)で描かれている箱橇とは違い、大人がタクシーのように使っている様子が描かれています。このように、同じ箱橇でも目的や使う人によって、さまざまな違いがあることがわかります。

ながそり

作成年代　昭和13年(1938)
寸　法　9.0×13.8cm

この作品に描かれている橇は二本橇と呼ばれるものです。この二本橇は荷物を運ぶための雪橇の中でも、最も基本的な形式です。この作品では、橇で米俵を運んでいる様子が描かれています。

馬そり

作成年代　昭和13年(1938)
寸　法　9.0×13.8cm

馬橇とは、馬に引かせる橇の総称です。馬橇は明治初期にロシアから伝わり、木材や人の運搬に使われました。その後、自動車の普及で急速に姿を消していきました。この作品の橇に描かれている「陸中花輪(りくちゅうはなわ)」とは、秋田県鹿角郡(かづのぐん)花輪町にあった陸中花輪駅を指していると思われます。

秋田風俗　橇五題版画集

かずそり

作成年代　昭和13年(1938)
寸　法　9.0×13.8cm

人や荷物の運搬に使われる橇は子どもたちの遊び道具でもありました。この作品の橇はほかの作品の橇とは違い、ハンドルがつき、足が四つに分かれています。橇に乗った子どもたちが雪の上を楽しそうに滑っている様子が描かれています。

秋田風俗　橇五題版画集

ばそり

作成年代　昭和13年(1938)
寸　法　9.0×13.6cm

この作品の橇には屋根がついており、「温泉行」と書かれています。このような大型の馬橇はより多くの人を乗せることができるため、乗合馬車のような役割を果たしていたと考えられます。

秋田風俗　春の版画集　其一

こま

作成年代　昭和15年(1941)
寸　法　14.8×9.0cm

この作品が作成された時代、独楽(こま)は子どもの遊びとして流行していました。この作品に描かれているのは、勝負用の独楽だと考えられます。相手の独楽に衝突させて弾き出したり、それを止めたりして勝負をします。

バツケヤ

作成年代　昭和15年(1941)
寸　法　14.8×9.0cm

バッケャは、フキノトウを指す秋田の方言です。特有の香りとほろ苦さがあり、食用として味噌で和えたりするなどされます。雪国の人々はフキノトウを見つけると、春の訪れを感じて喜んでいました。

おひなさん

作成年代　昭和15年(1941)
寸　法　14.8×9.1cm

屋外で女性が人形を並べているため、雛市の人形売りと考えられます。秋田には八橋(やばせ)土人形の産地があり、男子が生まれると天神を、女子には雛人形を買って祝いました。犬の土人形には子孫繁栄の願いが込められています。

彼岸花

作成年代　昭和15年(1941)
寸　法　14.8×9.0cm

この作品に描かれている彼岸花は、竹の枝に彩りのある造花をつけたものです。花が咲いていない春先に行われる祖先崇拝の仏事に、華やかさを加えるため、このような彼岸花を作るようになったとされています。

菖蒲

作成年代　昭和15年(1941)
寸　法　14.8×9.0cm

この作品では、家の軒先に菖蒲(しょうぶ)を差している場面が描かれています。これは端午の節句に行われる風習で、魔除けの意味を持っています。菖蒲が魔除けの役割を果たすのは、葉が剣型をしており、香りが邪気を払うと考えられていたからです。

イベント出展編 博物館実習の様子を見てみよう!!

① 企　画

体験の内容を話し合う

ここでは平成29年(2017)12月17日に行われた「ミュージアム・ユニバース」への出展を通して、博物館実習の様子をご紹介します。実習生が全体の企画名を「ASOBIの達人　ビヨンド」に設定し、子どもたちに楽しんでもらえるような昔の遊びは何かを話し合いました。

今回は、古代中国の遊び「投壺(とうこ)」をアレンジした「投壺うぉーず」を企画しました。投壺で使用する矢は、自分だけのオリジナルのモノを作成できるように、さまざまな材料を用意することにしました。そのほかにゲームに必要な道具を挙げ、予算の範囲内で準備します。

② 製　作

ゲームで使用する壺や景品、説明書きの製作をします。古代中国の雰囲気をイメージしつつも、遊び心のある製作を心掛けました。

また実習生それぞれが矢を試作し、ゲームの流れとアイデアの共有を行います。それによって当日のイベント進行の見通しを立てることや、子どもたちが作る矢の材料準備につながりました。

③ 本　番！

いよいよ本番! 子どもたちが来てくれるのか、楽しんでくれるのか不安でしたが、予想以上にたくさんの子どもたちが来てくれました!

オリジナルの矢を大学生とともにいろんな工夫をしながら夢中になって作り、高得点を目指してゲームに挑戦しました。創作中の子どもたちのイキイキとした表情が印象的でした。

会場となったせんだいメディアテーク

各館の活動紹介のポスター展示

東北学院大学博物館ブース

それぞれに個性ある矢を作る子どもたち

アイデアを出しあって楽しく体験

最後は壺に矢を投げ入れて対戦!

KOREMITE

コ考古学　レ歴史学　ミ民俗学　テ展示

— 東北学院大学博物館 収蔵資料図録 — VOL.3

編集・発行　東北学院大学博物館
発　行　日　2018年3月8日

〒980-8511 宮城県仙台市青葉区土樋一丁目3-1
TEL：022-264-6920
http://www.tohoku-gakuin.ac.jp/facilities/museum/